

俳句雜誌

空

空

平成31年3月10日発行

第17巻1号

通巻第83号



2019・2・3

SORA 83号

岡垣 田中とし江

里人の白衣ととのふ秋祭

お旅所へ跳ぬる草履も今年藁

秋晴や地べたに坐る豆力士

息白し神宝なべて玻璃の中

鎖もて閉ざす古墳や冬の月

北九州 横田敬子

母いつも緋のもんぺ大根蒔く

新米を軽々担ぎ男来る

秋天や尻高々と牧の馬

山の影山に映して蕎麦の花

並びたる牛の反芻冬隣

粕屋 吉田 葎

寒紅を拭ひ総身ゆるびけり

日向ぼこ首を振るにも力要る

まづ全部紙に穴あけ障子洗ふ

山裾は海に漬かりて新松子

草の根は墓石をつかみ寒明くる

福岡 田代貞香

鷹の目を思ひつつ鷹見上げけり

青空へ蠅螂は胸反らしけり

ドラム一打ジャズの始まる星月夜

酒樽の影の重たき冬はじめ

剪定の済みたる松に俄雨

大阪 田岡千章

赤い羽根つけ一日を胸の晴

赤い羽根手帳の栞とぞなりぬ

初紅葉プラットホームの先に指呼

新米を嗅ぐや家郷の梁太し

石榴裂けいつも留守なる古物商

直方 曾根 富久恵

沸騰す軍場跡の曼珠沙華

曼珠沙華蕊ちりちりと終はりけり

観音様へ下る坂道葛の花

田畑の平たくなりて冬に入る

ボンネットに雀来てゐる小六月

福岡 あさなが捷

きつちりと訳を伝へし雪をんな

省略を許さず母の年用意

大当り太鼓とどろく歳の市

風邪ひきてずつとかしづかれてゐたし

大空を背負つてゐたる奴唄

大野城 森 田 明 成

小面を懸けて秋思の深まれり

蜚露地はまた行き止り昼の虫

参道に百基の鳥居虫すだく

廃屋をがんじ搦めに蔦紅葉

街の灯の賑はひを増し冬に入る

福岡 三井所美智子

炭住の跡は花野となつてをり

草紅葉右も左も古墳かな

抽斗の螺鈿にじいろ一葉忌

風呂吹や時刻表なき姉妹旅

徹夜して縫ひしあの頃針供養

兵庫 林 徹也

ゆく秋や廃校に在る似顔絵も

聖堂は島の時打ち暮の秋

落日の瀬戸に溶け入る紅葉川

蹲のかくれ十字やななかまど

落人の跡に耶蘇の碑紅葉谷

京都 天谷翔子

青き月光致死量の母の愛

踏み込んで秋草の丈思ひの丈

月天心ブルーシート屋根あまた

今更の母の強情秋薊

母さんはどこと鬼の子揺れてをり

東京 遠山のり子

参道に大樹の影や鳥渡る

よく晴れて富士見ゆる日や鳥渡る

小鳥来る窓の高さは木の高さ

柿たわわ久しく人の住まぬ家

飛ぶ鳥を吸ひ込むかとも冬青空

神奈川 窪 み ち 子

東京 今 井 康 子

山裾にひそと生家や銀木屋

貴婦人リスボンと呼ぶる塔や冬鷗

良夜かな山並みいよよ彫深め

公達の舟漕ぎ出でよ月の波

四十雀鳴くやますます空青し

草の花犬にも遺髪ありにけり

霧に点る町に一つの信号機

愛用のまな板を干す冬うらら

松の影揺らしてゐたる秋の水

読み聞かす絵本や炬燵ありしころ

長崎 仲 里 奈 央

太宰府 西 住 三 恵 子

紅葉且つ散るひと言に救はるる

手庇に余る秋日の天守閣

切れかけの蛍光灯や冬めきぬ

あきくさのごつたの供華や地藏尊

七五三晴れ着にスニーカーで走る

落人の里に旅寝や栗の飯

臥す母の小さく笑ひ石露の花

立冬の御齋薄味とこしなへ

洗へども洗へども減らぬ子芋かな

神の留守びつくり水を二度三度

北九州 兒玉 充代

山々と同じ日を浴び冬耕す

地下足袋が梯子下りくる松手入

うしろより風吹いてくる桐一葉

かはたれや野分のあとも竹騒ぎ

これよりの夜長はじまる一書の香

兵庫 岩井 京子

冬の見ゆにゆく心さわぐ日は

冬の鶉の羽搏きしきり沖へ飛ぶ

小春日や山の雲見て海を見て

先頭集団気迫のマラソン過ぎて冬

最後尾に「医師」とゼッケン冬ぬくし

兵庫 青木 朋子

万葉食ランチ木の実を割る犬齒

団栗の墓地へ転がるまたひとつ

秋七草あふるる家に人気なき

神鹿のどさと横たふぬた場かな

橋の名のバス停三つ秋惜しむ

直方 吉田 悦子

父の忌や高まつてゆく蟬時雨

神前に笹竹立てて星祭

晩学は卓袱台あれば一位の実

十八に戻りて秋の同窓会

夕紅葉友と連れ立ち露天風呂

兵庫 大西 乃子

昭和には佳き男ゐし温め酒

青空と桜紅葉と瀬の音と

玉砂利にすずめのおそぶ七五三

出港を待ちて夜寒の岬の灯

まなかひに荒るる瀬戸内山眠る

兵庫 えとう 樹里

鳥渡る人工島にモノレール

初冬や磨かれし床黒光り

朝晴れの聖樹の森に入りにつけり

電飾の聖樹に見入り迷ひけり

仔を連れて鹿の来てゐる聖夜かな



空集抄
柴田佐知子抽出

鯰大根作りてひとり明日もひとり

岸 洋子

産むときの口して鮭の死にゆけり

吉田 菫

牛が身を擦りて冬木のくびれけり

永淵 恵子

親指に関節ひとつ衣被

曾根富久恵

海を呑み海を噴き出す鯨かな

戸栗末廣

秋の野や牛の重さの蹄跡

深川淑枝

青々と葉の威張りをる大根畑

中田みなみ

水入りのあと呆気なき草相撲

松田明子



糲殻焼くけむり暴走族を消す

湯ざめして俄かに瘦する思ひかな

戻りたき頃の布団の重さかな

杉の戸の素直な木目秋の風

雪囲ひ釘の頭のひかりけり

敬はるる覚えなけれど敬老日

へこみたるままの枕や虎落笛

地の核にマグマ地表に柿落葉

ピクルスの瓶の不揃ひ鴉日和

一つづつ手離し母の日向ぼこ

秋風の通り抜けたる軀かな

夫といふ他人と暮し炬燵出す

原 友子

石橋 幾代

高倉 和子

本多 トミ

千波 悠

角野 良生

山内 碧

田岡 千章

山本 則男

あさなが捷

亀井 紀子

仲里 奈央

枯葉にも神の宿れる岩戸かな

林 徹也

おしやべりな鳥と住みたき夜長かな

吉田悦子

知つてゐる役者も減りし日向ぼこ

河原敬子

園児来るどんぐり拾ひ尽くすほど

青木朋子

神木となるやも手の平の木の实

今井康子

記念樹のみな健やかに冬に入る

石川子熊

秋の灯や足の先まで年を取り

森田明成

逆茂木の埋もれてゐたる大花野

三井所美智子

出初式国旗降ろして終はりけり

苑 実耶

自転車の鍵穴釣瓶落としかな

古賀真理

一日はひとりに永し石路の花

田代貞香

ふらふらと来てしつかりと刺す秋蚊

西住三恵子



家長なら弱音を吐くな冬の星

紅葉や吊橋の影真一文字

冬の夜の鏡に映る部屋広し

ほこほこと日の中にあり枇杷の花

引越しの先づは神棚秋の空

文化の日国旗は遠くなりにつり

声出して草木の名前日向ぼこ

病得て余生楽しむ星月夜

豊の秋干物を焼けば音のして

仰のけに落ちてなほ鳴く秋の蝉

明け初むる虹色の空冬に入る

墓参り石の林をゆくごとし

西浦 優

田中とし江

見玉充代

大西乃子

むつみ蓮

後藤園子

遠山のり子

宮川正彦

小島翠波

佐藤和弘

倉智万数雄

大谷政光

空作品評

柴田佐知子

鰯大根作りてひとり明日もひとり 岸 洋子

家で鰯を捌いていたころ、アラで鰯大根を作ると大鍋
いつぱいになっていた。できたては美味しいのだが翌日
になると大根や鰯の匂いが強くなり味がおとろえた。さ
て掲句、一人暮らしであれば鰯の切身で作られたのだろ
うか。一人分の煮物はどうしても多めになりやすい。余
してしまわれたかもしれない。きちんとした生活を送ら
れていると思うのは〈鰯大根作りて〉に導かれるイメー
ジだろう。続く〈ひとり明日もひとり〉によって静寂が
ひろがってくる。たとえば〈明日もひとりなり〉と強く
言い切ってしまったら、句の情感は随分変わるだろう。

〈鰯大根作りてひとり〉で今が詠みとめられ、その時間は
下五の〈明日もひとり〉へと続いてゆく。つぶやきのよ
うな〈ひとり〉のリフレインが醸し出す寂寥感。且つ下
五の字余りが贅りのような余韻をもたらす。

この句のように日常の口事と思われる此事も、神経の
行き届いた言葉の選択によって、語感の裏にある心情を
伝えることができるのである。

産むときの口して鮭の死にゆけり 吉田 律

鮭の産卵は一生に一度だけである。生まれた川に戻り、
ひたすら上流を目指す。メスは産卵場所に着くと尾鰭で
川底の砂利を掘り産卵床を作り、オスはその場を奪おう
と噛みつき合い激しいバトルを繰り返す。産卵のとき
鮭は驚くほど大きな口を開け数度に分けて産卵したあと、
他のメスに掘りこされぬよう再び尾鰭を使って砂利を
卵の上にかぶせ、ポロポロの体で産卵床を守りながら息
絶える。必死で闘っていたオスも力尽きて死んでゆく。
やがて、孵化した稚魚は春になると川を下り海で生き抜
いて成魚となり、数年後に生れた故郷の川へと帰ってく
る。それは次へと命を繋ぐためであり、同時に死を意味
するのである。

掲句は死にゆく鮭を描写。〈産むときの口して〉と詠む
非情なまでの眼差しに心を貫かれる。生と死を繰り返し
ながら命を受け渡してゆく切なさを差し出してくるよう
な作品である。〈以下略〉

空集

柴田佐知子選



産むときの口して鮭の死にゆけり

粕屋

吉田 葎

いつまでも見送られたる実南天

狐塚月夜の道の蒼々と

いつの間にか男の話闇汁会

分校の校長室に神楽面

滑翔の鷺絶景を片寄する

追ひつきて魔神のごとく白き息

ひた隠すことも力やむかご飯

福岡

永淵恵子

藁塚の端のひとつが秘密基地

新藁をつけたる仔牛寄り来たる

牛が身を擦りて冬木のくびれけり

ひよこみな冬日の方へかたまつて

木守柿生家に兄のある限り

しばらくは畳替へたる部屋に座す

いまにして父に頷く根深汁

福岡

岸 洋子

茶の花や卒寿を句読点として

食卓で済むものばかり書き小春

本筋はまだ鱸酒に火をつくる

花舗の灯の届かぬところちちる鳴く

喪の帯を締め合ひし夜の虎落笛

鯽大根作りてひとり明日もひとり